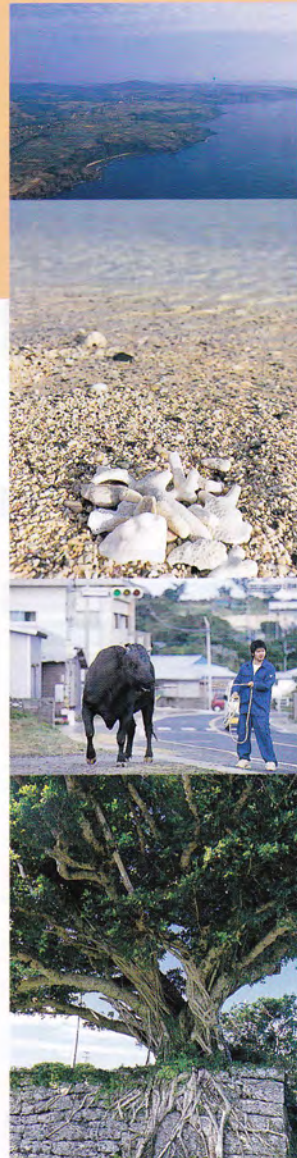


Slow Fooder's Story File *16

Feature article

タンカン



徳之島は、サンゴ礁が隆起してできた島。海辺の島は石灰質、貝の化石も多く見られ、石垣を残す家も多い。また、沖縄と同様に闘牛がさかん。薩摩藩に支配されていた時代に唯一許された娯楽のため、「なくさみ」というのだとか。

文●金丸弘美
Hiromi Kanamaru

写真●阿部雄介
Yusuke Abe

スローに 時が流れる 島で

タンカンという果実をご存知だろうか。

鹿児島県以南で栽培される

このミカンとオレンジの交雑種は、

ひそかに食通の間で話題になり始めている。

ゆったりとした時が流れる闘牛と石垣の島、徳之島でも

タンカンは島の将来を担っていく特産物のひとつであるが、

優良な生産者たちの視点は、

いつでも身近な家族たちに向けられている。

タンカンは、2月から3月に

かけて実る柑橘類である。皮が

薄く、しつかりした果実は、適

度な酸味がほどよく効いて実に

甘い。一つ一つの房が、ぎっし

りと詰まっていて、食べると果

汁が口中に溢れ出す。これほど

うまみの深い柑橘類はほかに見

当たらない。

ナイフを入れて2つに割って

みると、その房の詰まり具合が

よくわかる。美しい深いオレン

ジ色の、小さなツブツブが、隙

間なく埋まっている。1年かけ

て太陽のきらめきを、ずっと溜

め込んでいたかのようだ。

タンカンの存在は、ほとんど

知られていない。というの、も

タンカンの収穫は2月で、この

時期に霜の降らない地域に限ら

れるからだ。沖縄、奄美諸島、

屋久島、鹿児島県の温暖な地域

のごく一部でしか栽培できな

い。

なかでも徳之島は、タンカン

がとりわけ味わい深いと、ひそ



「クスリを
使わないのは、
子供や孫に送るから。
クスリは怖いもの」。



「自分たちの
家族の健康を
考えたら、農薬は
使いたくない」

タンカンは2月に収穫し、3月には東京でも手に入るようになる。その美味しさは、鳥が綺麗さっぱり食べてしまった跡が物語る。ちなみに福留さんのタンカンは、今年分は既に全て予約済み。詳細は徳之島・伊仙町町役場経済課(TEL:0997-86-3111)まで。



かに評判になっている。

徳之島は、鹿児島から南方500キロ、飛行機で約1時間のところに位置する島で、奄美群島の中の一つ。奄美大島と沖縄の間に位置する。周囲84キロ、人口は約3万人。平均気温が20・7度という暖かさだ。

サトウキビ栽培で知られるが、最近では、現役で最高年齢の本郷かまとさん(114歳)が育った島として、またマラソンの高橋尚子選手の合宿地としても話題になっている。

タンカンのルーツは、「鹿児島戦後果樹農業史」(久留正幸著)によると、中国広東省で、ミカンとオレンジが自然に交雑して誕生したもので、中国南部や台湾で栽培されてきたという。日本に入ったのは、台湾からで明治30年。本格的栽培は昭和4年の鹿児島県の大隈半島からだった。

奄美群島に渡ったのは昭和29年。ただ当時は、柑橘類その他の果実作物の害虫であったミカンコミバエがいたために他の島には移植が行われず、その絶滅が確認されて、昭和54年、徳之島、奄美本島、喜界島へ、その後、与論島、沖永良部島へと栽培が広がった。そして、いまようやく、タンカンの存在が徐々に知られ始めたのである。

地元で評判のタンカンを栽培するのは、徳之島の伊仙町の福留功さん(65)、ケイ子さん(59)、達也さん(36)親子。果樹では難しいといわれる有機栽培でタンカンを育てている。

サトウキビ栽培を主にしていたが、家族労働だけでは出荷が大変なこともあり、昭和60年からタンカン栽培を始めた。

病気や台風もあって栽培は試行錯誤だったという。徳之島は台風が直撃する。そうすると風雨で傷つくと雑草で汚れたようになる。「自分たちの家族の健康を考えたら、農薬は使いたくないもの」と、ケイ子さん。

台風の被害を少しでも避けるため山の窪地で栽培し、病気をさせないために風通しをよく木々の間隔を広げ、防虫や病気を防ぐために木酢や、微生物の発酵液をかけたりと工夫をしている。肥料も米ぬか、油粕、魚滓、赤土、鶏糞、サトウキビの茎の糞などを使う。たいへんなのは雑草だ。温暖なので、ピントん生えてくる。これも除草剤を使わず、刈って、大地に返すのだ。そうやって微生物の豊かな土壌から極上のタンカンが育つ。

一方「老夫婦だからゆっくりやってる」というのは、富原富伊玖さん(80)、ノブ子さん(79)夫妻。こちらのタンカンも評判だ。小さく形は不揃いだが、味は最高と、食べた人が歓喜する。

ご夫妻は、大阪や神奈川の子供や孫に送るのが楽しみで栽培しているという。

「クスリを使わないのは、子供や孫に送るから。クスリは怖いもの」と、ノブ子さん。夫婦で毎日畑に出て、手入れを欠かさず、雑草を刈っては、それを畑に戻して肥料にする。

「あとは、村の牛糞堆肥を分けしてもらおうと、ミカン用の肥料を入れるんです」

島は、冬でもコートがいらない。2月には桜が満開になる。ゆったり流れる時間のなかタンカンは味わい豊かに育つ。